



図3. ヒトの協調性の成り立ちの模式図。コアが利己的な遺伝子に由来する部分。遺伝子は、自己を増殖させようとする。だから自己に近い親や子を守ろうとする。敵は自分の血筋を奪うもの、さらには同種の仲間を滅ぼしかねない異種生物になる。カマキリの雄は、雌が子供を生むときには自分の体を差し出して、雌の栄養となってしまう。小鳥の親は、猛禽類が子供たちのいる巣に近づこうとすれば、自分の身を差し出して戦うなり、誘導するなりして子供を守ろうとする。どんな生物も持っているはずの協調性であり、ある意味受動的な協調性と言えるかもしれない。何故なら利己的な遺伝子の増殖圧力に操られた性質と捉えられるから。だが、そのお陰でそれぞれの生物はこれまで生き残ってきたのである。次は積極的な協力欲に由来する部分。例えばライオン並みの協力である。ライオンは血族中心の群れをなし、水場近くに縄張りを作っている。この帰属集団は、上記利己的な遺伝子の行動原理／欲求に基づいて作られている。そして、サバンナで効率よく狩猟するためには、集団で協力しなければならない。つまり、本能として協調性が遺伝子に組み込まれた形でライオンという種が生まれたのである。こうした協調性を協力欲と呼びたい。ヒトもチンパンジーから進化した時、この本能的な協力欲も獲得した。大抵は血族という縄張りを持ち、敵はその同種仲間をも殲滅させようとする異種生物と、その縄張りを侵す同種集団である。ヒトの場合、明確な帰属集団があれば、血族でなくても敵は明確になっている。さらに次の部分が多分ヒト固有の文化に由来する協調性であろう。家族を持ち、社会生活を営むようになって、情報に基づいた学習により功利的な互恵的利他主義が生まれたと考えられる。ここでは情報が重要なファクターである。敵は、異種生物はもとより、互恵的でない集団、帰属集団以外の集団が敵となり得る。さらにその内にもう一層分の協調性の枠を敢えて当てはめようとするならば、現代社会のように、50人を超える不特定多数社会での社会のルール、つまりは宗教や法律や罰則のような枠組みがその四層目の協調性に相当すると考えられるだろう。その枠組みは大抵が恣意的であり、かつ生物の論理とは矛盾するようなものが多々ある状況であろう。人々は、この社会のルールと個々人の協力欲との齟齬に苦しむことになった。